

## 『ぼく』

ぼくの言うことなんて、だれも聞いちゃいない。この前、ママがご近所さんからカラスミをもらったときだってそう。ああ、カラスミって何だか知ってる？正直なところ、ぼくもよく知らないんだ。どうやら高級なチンミらしいよ。お兄ちゃんもパスタに和えて食べたいうって言うし、パパはそのままあぶって食べようって言うし、大騒ぎになって、ぼくは、どっちでもいいからはやく食べてみたいって大声を出したけれど、だれも耳を貸してくれやしないんだ。結局、ママが、慌てなくてもカラスミは一年以上もつものよ、なんて言いながらいそいそと冷凍庫にしまいこむのを、苦々しい思いで眺めているしかなかった。長持ちしすぎるってのも問題だよ。

ぼくはお兄ちゃんに連れられて、いろんなところに出かける。毎月、老人ホームにいるおばあちゃんに会いに行くんだけど、おばあちゃんはいつもお兄ちゃんに、期末テストはどうだった？って聞くんだ。お兄ちゃんは頑張りましてって答えて、おばあちゃんの足のマッサージを始める。お決まりの儀式なんだ。その時のおばあちゃんはとつても嬉しそうな顔をするんだ。ぼくの方はというと決まって、また大きくなつたねえ、なんて言われる。でも、一カ月やそこらで大きくなつてなりやしない。お兄ちゃんが、居間の柱でときどき測ってくれるからちゃんとわかっている。それでもそう言われると、ちよつと背筋を正して伸び上つてみたりしてしまう。ぼくはどうも猫背らしいから。

それはそうと、今ぼくは、おじいちゃんのお家にいる。おじいちゃんは何年前かに死んでしまった。空き家になったお家に、季節の変わり目ごとに、手入れを兼ねてみんなで泊りに行くのが恒例になっている。ここは空気がきれいで、陽のあたるぼかぼかとした広いお庭があって至極快適なんだ。お家も立派で、モダンな造りの頑丈な門から続く素敵な小道を抜けると、彫刻の入った木彫りのいかめしい大きなドアが迎えてくれる。ぼくはこの小道が大のお気に入りだ。実は、このお家には秘密がある。文字どおりの「開かずの間」があるんだ。

お兄ちゃんと一緒に、たくさんあるお家の部屋をひとつひとつ見て回った時、二階のぎしぎしきしむ廊下を曲がってすぐのところ、長いこと誰からも忘れられていた感じの古びた扉があった。その辺りは普段使われないからか、昼間から薄暗くじめじめしていて、すごく埃っぽい。そして何より、その扉にはドアノブがついていなかったんだ。そのかわり、本当ならノブがはまるべきところに、小さいミカンくらいの大きさの黒い穴が開いていて、すごく不気味だった。そのドアを見たとき、ぼくは怖くて逃げだしたくなつたよ。お兄ちゃんがドアを押しても引いてもちつとも開かない。ノブがないんだから当たり前だよ。ね。いい加減開けるのは諦めて、ふたりでその黒い穴を覗き込んでみたんだ。

部屋の中は天窓があるせいか、意外に明るかった。思ったより奥行きのある部屋で、いくつも置いてあるタンスの上にかけられた白いシーツがお化けみたいで怖かった。でも、何よりぼくたちが気になつたのは、穴から真正面に見える壁にかけてある一枚の絵だった。表面がデコボコしていて、たぶん絵の具で描かれたものじゃない。どこまでも続く長い小道をゆく子供たち、青い空と緑の山々、そして小道の両側一面に咲いた黄色いラッパみたいなお花。少し色あ

せてはいたけど、すごくセンスのいい絵だと思ったね、ぼくは。とにかく、その絵だけが穴から見える唯一の色彩というか、そう、お兄ちゃんの言葉を借りれば、モノクロの部屋の中でイサイを放っていたんだな。夕食の席で、お兄ちゃんが一階に開かないドアがあると話しても、パパとママは、そのうち直すからとかなんとかいつて取り合ってくれなかった。ぼくはそばで聞いていて、歯がゆくてたまらなかったよ。

その翌日、みんなは買い出しに行き、ぼくは一人で留守番をすることになった。パパから、留守を頼むよと言われたとき、ぼくは、お家を任されたという誇らしい気持ちでいっぱいだった。やがて、みんなが出ていくと、急にお家の中が静かになった。ぼくはしばらくの間は、一階の居間でおとなしくしていたけど、だんだん退屈になってきて、お家の中を探検し始めた。ふと、二階のどこかでぎいと音がした。ぼくははっとして階段を駆け上がった。でも何も変わったところはない。古いお家はきしんだり、家鳴りがしたりするとか聞くから、たぶんそれだったんだらう。ぼくは、また居間に戻り、あくびをしてソファで目を閉じた。しばらくうとうとしていたぼくを起したのは、玄関扉がかちやりと開く小さな音だった。みんなが帰ってきたと思って飛び起きた。でも、ぼくはそこで待てよと思っただけだ。足音が一人分しか聞こえない。ただならぬ気配を感じて、ぼくはとっさにソファの陰にかくれて様子をうかがった。

居間に入ってきたのは、見たことのない男の人だった。やせた体に黒い上着を着て、同じ黒の手袋をはめていた。腰のベルトに鉄の棒みたいな道具がたくさん差してある。そつと見上げると、白髪頭のおじさんのやつれた顔が目に入った。こう言っちゃなんだけど、男の人はちょっと貧乏臭くて、大きなかぎ鼻だけど、その時はびくびくして、かぎ鼻さんの動きをただ見守っているだけだった。かぎ鼻さんは油断なくあたりを見回すと、そのまま居間から出ていった。ぼくもそつとソファの裏から抜け出す。かぎ鼻さんは一階をあらかた見て回ると、二階へと上がっていった。ぼくもその後ろからこっそり忍び足でついていく。かぎ鼻さんは慌てる様子もなく、ゆっくりとした足取りで次々と部屋を見て回った。そして遂に、あの「開かずの間」のドアの前にたどり着いたんだ。かぎ鼻さんは、ドアノブのない扉をじつと見つめたあと、いきなり腰に差してある不思議な形をした鉄の棒みたいなものを取り出し、黒い穴に突っ込んで、がちやがちややりだした。やがて何かがはまるかちつという小さな音がした。ドアが開いた。ぼくは驚いたよ。そして興奮した。だって「開かずの間」が開かれたんだ。部屋に入るなら、そして、このお家の秘密を解き明かしたいなら、今しかない。決死の覚悟で、すうつと閉まっていくドアの隙間から中に身をくぐらせた。キヨミズノブタイからとびおるっていうのはまさにあの時のぼくのことをいうんじゃないかな。ぼくが中に入ると同時にドアは閉まった。ぼくはドアのすぐ近くにあったテーブルの下にもぐりこんで、脚の陰から様子を探った。かぎ鼻さんは、すぐに例の絵に気づいた。あの絵をみたとき、かぎ鼻さんが一瞬息を飲んだのがわかったよ。でも、その表情までは見えなかったな。かぎ鼻さんはしばらくじつと絵を眺めたあと、壁からそつと額を外し、大事そうに小脇に抱えた。そして、またドアのところまでひとしきりがちやがちややっていたかと思うと、さつと部屋から出て行ってしまった。ぼくも閉まり

かけているドアに飛び込もうとしたけど、間に合わなかった。うつかりしていったんだ。ぼくの力ではドアはもう開けられなかった。ぼくは薄暗いじめじめした「開かずの間」にひとり閉じ込められてしまった。額が外されたところだけ日焼けしていない壁紙がまぶしいくらい白く光っていた。背後から白いシーツの幽霊が迫ってきているような気がして、ぼくは壁にぴたりとしっぽをくっつけて、震えながら助けを待ったんだ。

『僕』

昼下がりの自宅のリビングで、僕はちびを膝にのせて、亡くなった祖父が残してくれた古いジャズレコードに耳を傾けている。やはり祖父の家の年代物のスピーカーで聴くのは全然違う。低音のあのふくよかな響きは望むべくもない。

そんなことを考えながら、僕はちびに話しかける。「あの時は災難だったね。ずつとひとりで怖かったろう。」ちびは毛繕いの最中である。「つまりお前だけが犯人の顔を見ていたのか。」

僕は一か月前に祖父の家で起きた事件を思い出している。それはそれは奇妙な空き巣だった。犯人は、貴重品には一切手をつけず、ただ二階のガラクタ部屋の壊れた扉にドアノブを取り付けて立ち去ったのだ。もともと僕としては、長く学校の先生をしていた祖父が、祖母の嘆き節によれば、薄給の大半をつぎ込んで集めたというレコードコレクションが無事だったことに一番ほっとしたのだが。

どうして入り込んだものか、その物置部屋に閉じ込められて、みゃうみゃう鳴き続けているちびを発見した時、僕は、外れたノブの穴越しに見えた、あの風景画がなくなっていることにすぐに気づいた。それから、ちびを抱き上げようと腰をかがめ、部屋の空気に匂いを感じてふと顔を上げた。物置部屋には、かすかにこれまでかいたことのない甘い匂いが漂っていた。お香のような独特の香りを今も覚えている。

警察は一応呼んだものの、被害も特になく、むしろ扉を修理してもらったようなものなので、届けは出さなかった。僕はおずおずと、物置の絵が一枚なくなっていると言ってみたものの、両親は貴重品が無事だったことですっかり安堵してしまい、どうせたいした価値もないんだからと特に問題視されることもなく、結局うやむやになった。

割り切れない思いを抱えているのは僕一人。子供の悪戯にしては手が込んでいるし、もしかして死んだ祖父が化けて出たのではあるまいか。あんな絵一枚だけ盗んでいくために、わざわざ家に侵入するなんて馬鹿げている。考えれば考えるほど薄気味悪くなってきた。

「ねえ、ちび、犯人は誰だい？どんな奴だった？」ちびは素知らぬ顔をして、前足で顔を洗っていた。

『俺』

俺には何かが足りない。満たされない。それを感じ始めたのは七年前に妻を亡くして以来だ。子宝には恵まれず、俺には頼るべき家族も親戚もない。一軒家の一人暮らしは淋しいものだ。いつまでも過去を引きずり、無気力に日々

を送る自分が嫌になって、俺は骨董屋をやるうと思いついた。今となっては、なぜ骨董屋を選んだのか自分でも分からない。ただ、何かしていたかった。少しでもこの欠落感を埋めてくれる何かを。自宅の模様替えは一人でやった。歳月のしみ込んだ壁紙を無造作に引きはがし、長いことリビングを照らし続けてきた飾り電球も外した。そして、その上からすべてを覆い隠すように重厚な茶色のペンキをひたすら塗りにくった。頭を空にして機械的にやった。骨董屋らしい薄暗く落ち着いた内装ができると、少しばかり商品を仕入れて、店の中を眺めてみた。俺の中で骨董屋と呼ぶに相応しい空間を作り上げることができた気がした。しかし、少しばかりの達成感の裏で、俺は相変わらず満たされない自分があることにも気づいていた。

生前、妻はよく、さながら俺は太陽で、自分は月のようだと言っていた。突拍子もない例え話に聞こえるが、要するに、俺が頑固で変わらないから、そばにいるあいつが振り回されてばかりだという意味なんだろう。でも俺は今、つくづくそれは逆だったような気がしている。家の中で、いつも中心になって輝いていたのはあいつで、俺はその光をもらっていただけだったのだ。

骨董屋は思っていたより厳しい商売だった。初めの頃は、オークションに参加しては同業者の剣幕に押されてたじたじとなり、人の亡くなった家に遺品買取りの電話をかけるのも気が引けた。それでも一年もすると、下手をすれば大損をしたり騙されたりすることも日常茶飯事の生き馬の目を抜くようなこの世界で、飄々とやっている自分がいた。木像や塗り物、陶器、置物、家具など多種多様な品々を発掘し、売れるたびに新しいものに入れ替えた。儲かる商売ではない。客もめったに来ない。俺は奥の机で一日の大半を店の主人面をして、ただぼんやりと過ごしているだけだった。

俺は昔からジグソーパズルが好きだった。それもほとんど埋まってきて、最後の数ピースがはまって凶柄が立ち現れてくる時が一番楽しい。店にいても、雨の日などは半ば開店休業だから、一人ジグソーパズルに没頭していた。あれは土砂降りでも人っ子ひとり通りを歩いていない夕方のことだった。一度完成したツリーハウスのパズルを崩して、もう一度作ろうとし始めた時、俺はふと、世の中の家をより完璧なものにしてやりたい、という強い衝動に駆られた。その衝動はあまりにも唐突でわけがわからないものだったから、俺自身、自分は何を考えているんだと訝った。しかし、俺はその一時の感情の発露を決して忘れなかった。

そういえば、妻は俺のことを神経質だと言ってよく笑っていた。確かに、俺は花瓶の位置や家具の向きや壁紙の色にはこだわりがあつて、独自の美学を持っているつもりだ。部屋はこうあるべきだ、家はこうあるべきだという固定観念が他人より強いのかも知れない。締まりのない部屋にいと、無性に居心地が悪くなり、背筋がぞくぞくするような気味の悪い歯がゆさを覚える。そんな時、たとえそれが他人の家でも、ダンスを少しずらしてみたり、勝手に棚の上の小物を置き換えたりしてしまうのだ。そういう生来の気質のせいもあつてか、俺は頭の片隅にこびりついて離れない、あの土砂降りの夕方に心をよぎった常軌を逸した思いつきに、知らず知らず傾倒していった。

俺が副業を始めたのは二年前のことだ。俺は俺なりの信念に基づいて、今日

までそれを続けてきた。車で町中を回って、これはという家に目をつけると、人気のない時間を見計らって家に上がり込み、ちよつとした手直しをする。まあ、体よく言えばそうなのだが、これを不法侵入という奴もいるだろう。もちろん金品に手をつけることはしない。あくまで家全体の不均衡を見定め、それぞれの家に欠けている何かを持ち込んで、それを解消するのが目的だ。あるときは、この庭は美しくまとまっているがアクセントに欠けていると思ひ、北歐風のノームの像を植込みの合間にそつと置いた。また、サイドボードに飾ってある小さなウサギの七福神の置物に欠けていた大黒様を加えてやったこともある。梯子を持ち出して屋根の上に風見鶏を設置したときは、さすがに見つかるとはならないかと冷や汗をかいた。俺は決して世直しかか慈善とか、そういう崇高な理念をもって動いているわけではない。とにかく欠けている状態がいやなのだ。ただ、いくら副業に精を出しても、俺自身が満たされることは一度もなく、いつもその場限りの満足を得るだけだった。その後は決まっていたよりも余計に、自分の心の空洞の奥深くを覗き込まれているような気分になったものだ。結局、俺自身何も変わっていないのだった。

それは空一面が薄く平べったい雲に覆われ、時折妙に生温かい風が吹く日のことだった。俺は空模様を気にしながら車をゆつくりと走らせ、左右の住宅街の様子をうかがっていた。そして、この辺りがよさそうだと勘を働かせて、ブレーキを踏んだ。俺は車を降り、一帯の家々の人影の有無を確認しながら歩いていった。俺の足はいつの間にか、この辺りではかなり大きい部類に入る一軒家の前で止まっていた。一階二階ともに人氣がなく、あまり生活の匂いのしない家だった。鉄柵越しに見える庭は整っており、やや雑草が伸びすぎている点を除けば申し分なかった。俺は通りに誰もいないことを確認し、鉄柵を乗り越えた。意外に高かったが、慣れとは恐ろしいものだ。おとぎ話に出てきそうな小径を抜けると、凝った彫刻が施された玄関扉に行き当たった。腰からドライバーを改造した自作の装置を慣れた手つきで引き抜き、鍵穴に差し込むと、瞬間に扉がきしみながら開いた。

この家の主人はなかなかの洒落者だと俺は思った。事実、俺の厳しい審査基準を満たさぬ箇所は見つからず、居間の家具配置から壁沿いの小棚のインテリアに至るまで、俺の方がセンスの良さに驚いたほどだった。安全性に問題のありそうな段差の高い古びた階段を登っていくと、長く暗く伸びる廊下が目の前に続いていた。古い家特有の湿った空気が漂う中、廊下を進んでいく。底なしの暗闇のように見えていた廊下は見かけより長くなかった。突き当りを右に曲がってすぐのところ、一枚の小さな扉が俺を待っていた。奇妙なことに、その扉にはドアノブがついていなかった。

その時、俺は誰かに見られている気配を感じた。わざとゆつくり振り返ってみると、いま登ってきた階段の手すりの暗がりから、一匹の猫がこちらを覗いていた。どこにでもいる小さな茶トラ猫。よく手入れされたきれいな毛並みをしている。予想外の闖入者に少し驚いたようだが、人には慣れているのだろう。目をまん丸に見開いたまま、置物のように身動きをしない。俺はほつとして、目の前の取っ手の外れた扉にもう一度向き直った。

ドアノブの抜けた穴は、周囲の闇よりも一段と暗く、俺は底知れない不気味な穴から目を離せなくなった。気が付くと、俺はその穴に落ち込んで、漆黒の

暗がりの中を彷徨っている自分自身を穴の上から見下ろしていた。ドアノブをつけなければ。欠けたものは埋めなければ。俺は穴の中に例の道具を差し込み、左右に軽くひねった。扉はぎいと開いた。

俺は長いこと人の入ることのなかった物置の中で立ちすくんでいた。部屋の天窓から漏れる光の中に一枚の絵が浮かび上がっていた。俺はその絵を見たことがあった。俺はその絵を覚えている。俺は、あの黄色い花を、風景を、覚えている。俺は不意に懐かしさを覚えた。俺はこの絵を描いた。これは、俺の絵だ。俺の頭の中を子供の頃の映像が、記憶の流れが、奔流となって駆け巡った。俺がこの絵を描いたのは、まだ俺が小学生の頃だ。しかし、なぜこれがここにあるのか。不可解だった。

この絵の風景は、修学旅行で新潟の魚沼に行ったときのものだ。灰色の道のように描かれているのは、尾瀬国立公園の木道だ。旅行の後、凶工の時間に「旅の思い出」というテーマで絵を描かされた。旅行最終日の花火大会の絵を描く子が圧倒的に多い中で、俺はひとりこの風景を描いた。いや、正確には描いたのではない。この絵は和紙を貼って作った貼り絵だ。配られた厚い画用紙に輪郭を下書きしてから、色とりどりの和紙をちぎっては貼り、ちぎっては貼っていった。絵の具を使って描いた同級生はいつの間にか次々と描き終わっていきがらんとした凶工室には俺が紙をちぎる音だけが響いていた。きっと俺の凝り性はあの頃からだ。教室の横の掲示板にクラス全員の作品がはり出されると、俺の絵はとて地味に見えた。

俺たちの小学校では最高学年になると、進路面談も兼ねて、数人ずつ校長と昼食会をする決まりになっていた。俺は正直もう当時の校長の顔を覚えていない。しかしあの日のことはよく覚えている。俺と三人の同級生は校長室の長い机に横並びに座り、その向かいに校長が座っていた。食事をしながら、校長は、俺たちに順番に、将来の夢や大人になったらやってみたいことなどを聞いていった。右端に座っていた俺は、校長から質問されるのは最後だとわかっていなかった。ただ黙々とスプーンを口に運んでいた。そういえばあの日の給食はカレーだった。俺の番になると、校長は開口一番、「君の絵を見たよ。ちぎり絵ならではの味わいがあつてとても良いと思った。山と道の構図も上手だし、絵全体に奥行きとか深みがあるね。君、あれは是非コンクールか何かに出品してみるといい。」と言った。俺は驚くと同時にひどく嬉しかった。すぐに話題は移ってしまったが、そのあと校長から何を聞かれたか、何と答えたか、全く覚えていない。俺はその日、校長の褒め言葉だけを反芻しながら家に帰った記憶がある。校長は、学校を通じて、本当に俺の絵をコンクールに出してくれた。俺はコンクールで入選した。コンクールの名前は忘れた。全校朝会の表彰台で賞状を渡された時は、実に誇らしかった。俺はそれから一か月後に親の転勤で引っ越すことになった。あまりに急だったので、級友に別れもろくに言えなかった。あの絵は職員室前の廊下に飾られていたはずだが、その後どこにいつてしまったのか、思い出せなかった。

俺は我に返った。俺の絵は立派な額におさめられていた。気が付くと、俺はそれを壁から外していた。ずっとそこに掛けてあったのか、額を外すとその部分だけ真っ白い壁が顔を出した。絵を抱えてゆつくりその部屋を離れようとしたとき、俺はまだ肝心のドアノブを付けていなかったことに思い当たった。足

元を見まわすと、擬人化された月をかたどった丸い真鍮のドアノブが転がっていた。そういえば、廊下の段ボール箱の上にもう一つあったと思い出し、ドアを開けて対になるノブを手にとった。それは、目鼻のついた太陽をかたどったくすんだ金色のノブだった。一對のドアノブなのに表と裏で模様が違う。一瞬あいつの顔が頭をよぎった。俺は、何かこう、脳天をがんとやられたような気がした。その時、頑なだった俺の中で何かが変わった。

家を出て、小径を戻り、帰りがけにふと振り返ると、入り口の鉄扉の横の小さな錆びた表札が目に入った。懐かしい思いがこみ上げてきた。表札の名前は、あの日一緒にカレーを食いながら話をした校長の苗字と同じだった。俺は助手席にそっと絵を立てかけ、アクセルを踏んだ。窓を開けると風が心地よかった。その日を最後に、俺は副業を廃業した。

### 『ぼくと僕と俺』

ちびが不貞腐れている。久しぶりにお気に入りの祖父の家に遊びに来たというのに。父さんが、祖父が愛用していたこだわりの木製ヘッドホンでジャズを聴いている。母さんが夕飯の下準備を始めている。ちびはなかなか味にうるさい猫だ。安物のキャットフードには見向きもしない。最近が一番値の張る「ノーブルキャット」しか食べない。「ごめんよ。この辺では売ってないみたいなんだ。」ちびは憤然としてテーブルの下のカーペットで頑張っている。そのうち、いつまでそうしてもごちそうは出てこないと感じくと、不満気にみゃうみゃう鳴き始めた。「ちび、静かに。」こうなると何を言っても無駄だ。あまりにうるさいので、父さんはヘッドホンを外して顔をしかめ、母さんはレタスの水を切る手を止めて、居間に顔を出した。「時間もあるんだから、隣のスーパーで買ってきてやったらどう？ちびも連れて。」

僕は電車に揺られている。この時間帯の利用客はあまりいないのか、かなり空いている。膝の上には小さいバスケットがのっている。中ではしたり顔のちびが悠々と寝そべっている。車窓を流れる住宅地の家々の隙間から、時折、オレンジがかった陽光が低く差し込んでくる。僕は一つため息をつき、三駅目で降りた。閑散とした改札を出ると、西日に照らされたうら寂しい商店街が延々と続いていた。既に灰色の分厚いシャツターが下りている店も少なくない。僕は左右を見回しながら、キャットフードを扱っていいそうな店を探した。

しばらく歩いてみると、面白い店を見つけた。それは商店街の本筋から少し横に逸れた小道に面していた。入り口には大きく頑丈そうなガラスケースが並んでおり、その中にはドアノブが陳列されていた。それも一つや二つではなく、形や色、大きさも全く異なるものがたくさん置かれており、それぞれが違った趣きを備えていた。黒い金属製のガーゴイルの頭部、金色に輝く星やクリム色の波、流線型をした緑色のイルカといった凝った作りのものもあれば、一見シンプルな握りや引き戸式の取っ手もある。それらがケースの中でひしめき合っている様は壮観だった。僕はその店に吸い込まれるように入っていた。

店内は暗く、茶色が基調の落ち着いた雰囲気だった。天井からはゴシック風の照明が吊るされ、鈍く揺らめく光を放っている。がっちりとした木製の棚がいくつも配置され、彫像や絨毯、大小様々な置物や年代物の陶磁器が所狭しと並べられている。壁にまで毛皮や古めかしいタペストリー、ちよつとした抽象

画などがびっしりと掛けてある。骨董屋だったのか、と僕が一人合点して店内を見まわしていると、ふと辺りを漂う甘い匂いに気づいた。お香のような古い匂い。前にもかいたことがある。僕は、あの空き巣が入った日、祖父の家の物置部屋に漂っていた印象的な匂いを思い出した。そう、あの時と同じ香りがする。僕は棚の間を奥へ奥へと歩いて行つた。突き当りのカウンターにおじさんがひとり座って本を読んでいた。僕に気づくと顔を上げた。薄暗く不安定に光る明かりの下で、おじさんの顔だけが浮かび上がっているようだった。特徴的な鉤鼻で、初老の男だという以外には年齢を推測しにくい顔立ちをしていた。「おや、若いお客さんかい。これは珍しい。何をこそ望かな。」僕は急に気まぐらなうって、謝って店を出ようとしたが、「いや、いいんだよ。趣味でやっているような店だからね。一日中こうしてじつと座っているのさ。わしもたまには話し相手がほしくなる。ほら、そこにお掛けなさい。」と隅の丸椅子を勧められた。僕はぎこちなく座ると、肩にかけていたバスケットを膝にのせた。ちびが妙なおとなしい。黙りこくっているのも失礼かと思つて、話しかけてみた。「素敵なお店ですね。」「そうかい。ありがとうよ。最初は慣れなくてね、いろいろと苦労したものだ。ここには色んな品が集められている。ずっと遠い国のものもあるんだよ。がらくた同然の山の中に埋もれている価値のある品物を探し出す。それがわしの仕事だ。常連さんも何人かはいるが、それでも滅多に客は来ない。むしろ古道具や建具の修理を頼まれることの方が多くてね。そういう商売なんだよ。」おじさんは腰を上げると、店の奥の暗がりへと消えてゆき、盆に茶器を載せて戻ってきた。「口に合わなかつたらすまん。」僕は恐縮してお茶をいただいた。少し苦かったが、飲めないほどではなかつた。

その後、おじさんは、店の骨董品の数々を取り上げて、それらひとつひとつにまつわる面白い話を聞かせてくれた。いつしかおじさんの話も一段落し、僕とおじさんは、夕暮れの店内で向かい合つたまま沈黙していた。店中から漂うあの甘い香りは目に見えない織物のようにふわりと広がり、僕を包んでいた。珍しくみやあとも言わずにバスケットの中でおとなしくしていたちびが、もぞもぞと動くのが膝伝いに感じられた。僕は聞いた。「この匂い、お香みたいな香りは何ですか。」急に暗さを増していく店内で、おじさんの輪郭はもはや定かではない。しばらく間があつて、「麝香だよ。いい香りだろう。家内がとても好きだったんだ。」

店を出ると日は沈みかけていたが、まだあたりはほんのりと明るかつた。商店街沿いの街灯もおぼろげに点き始めている。空にはもう薄く月が姿を現していた。振り返ると、今にも、夕闇に骨董屋が溶けていくようだった。遠く次第にかすかになつてゆくその姿を眺めながら僕はちびに「あの人だったのかな」と聞いた。夕闇の中、ちびは満足気にみやあおうと鳴いた。通り沿いのガードの上をかたんと電車が通過していった。